偶然から必然へ
～偶然成り立つ野鳥との共生～

東　信行（弘前大学農学生命科学部）

日本をはじめ, 多くの国では低平地を人間が高度に利用しており, その多くは農地である．一方で，そこには代償的な自然環境が存在し，多くの生物が生息してきた．しかしそれらは偶然成立してきた関係であり，ある意味生物のしたたかさを知る現象とも言える．例えばメダカやドジョウなど，一部の水生生物は，水田の広がりとともに生息範囲，個体数を拡大してきたと考えられる．日本は瑞穂の国であるため，伝統的な稲作が営まれていた間には，本来の後背湿地以上の広がりや個体数の増大を担った可能性は高い．同様のことは湿地性鳥類の一部にも当てはまったのかもしれない．しかしながら，現在の農業環境は，生産性の向上のために野生生物との共存を困難にさせる方向へと変化しているといえる．

農耕地における野鳥との共存は，現在でも無意識のうちに成立しているものが多い．多くの鳥類が農耕地で採食や繁殖をすることは，現在でも当たり前の光景になっている．しかしながら，この光景は相変わらず偶然成り立っているものであり，常に崩壊するかもしれないというバランスの上で成立していることを意識しなければならない．農耕地における野生生物と人間活動の共存は，今まで以上にそのメカニズムを生態学的に理解する時期に来ていると言えるだろう．

本報告では，青森県津軽地方における事例を紹介し，農耕地における野生鳥類の生息に関し，考察する材料を提供したい．

津軽平野を中心としたこの地域は，農業によって高度に利用されている場所といえる環境にあり，特に水田は，河川の流域面積に対して極めて多くの面積割合を有するため，歴史的にも水不足が頻発し，東北地方には珍しくため池も多く存在している．また，水田以外でもリンゴ園が多くの面積を占め，低平地から里山環境といえる場所まで，徹底して農地として利用されている地域である．

このような環境の中，①ため池における，水草－魚類－鳥類の関係をため池の構造や管理の視点から，②リンゴ園における樹洞性鳥類のすみつきと環境構造，農家の思い，といった視点から，偶然発生した共存の事例を中心に紹介する．

複数のため池間の群集比較により，ため池の水底勾配や浚渫方法，水管理の違いから，ブラックバスによるため池生物群集へのインパクトが異なることが明らかになってきた．この現象は水草帯の発達とその生活型に関係があることが示唆され，浚渫方法の重要性が示されている．また，果樹園の環境は，時間とともに変化する点で毎年同じような季節変化を示す水田とは異なるものの，現在フクロウやノスリなどが頂点となる生態系として確立しているという現象は, 他の農耕地生態系が成立してきた過程と類似していると考えることができる．樹洞供給量の多さが，樹洞性の鳥類を生息させていることは明らかであるが，巣立ちまでの生存率の高さなどから，単なるエコロジカルトラップとなっていない点は注目される．津軽のリンゴ園では，本来の低山帯の生態系を二次的に変化させ，独自の環境となったと考えられ得る．